



年頭挨拶

北海道開発局長 遠藤達哉

明けましておめでとうございます。

謹んで新年のお喜びを申し上げますとともに、平素から北海道開発行政の推進に特段のご理解とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

昨年7月に北海道開発局長を拝命し半年が経ちましたが、昨年を振り返りますと、私としては、北海道総合開発計画の第9期計画（以下、「第9期計画」）の取組の推進に力を尽くした1年でした。

前職で第9期計画推進のための計画推進部会の立ち上げに関わり、有識者の方々と様々な議論を交わす中で、改めて北海道のポテンシャルの大きさを感じました。食料安全保障の観点からも、北海道の安定した高い食料供給力を期待されていると思いますし、観光立国を目指す上でも北海道の力が必要とされています。さらには、2050年カーボンニュートラルを目指していくためには、北海道に存在する豊富な再生可能エネルギーを最大限活用することが求められていると思います。このようなポテンシャルを活かし、北海道が発展し、さらに全国に貢献をしていくためには、価値が生み出される北海道の生産空間をしっかりと維持発展させていかなければならぬと考えます。そのためには、人流や物流のネットワーク等のインフラ整備を始めとして、様々な取組をしっかりと進めていくことが必要です。

インフラ整備における昨年のトピックは、昨年3月の後志自動車道の仁木IC～余市ICの開通が挙げられます。この開通により、後志地域と札幌市、新千歳空港とのネットワーク機能の強化が図られ、物流強化、観光振興、救急搬送の安定性・速達性向上等の効果が期待されています。また、道東自動車道（以下、「道東道」）の阿寒IC～釧路西IC間は令和6年12月に開通し、開通から1年が経過しました。この開通により、

阿寒IC～釧路西IC間及び並行する国道における死傷事故が約4割減少したほか、北海道で初めて線状降水帯が発生した昨年9月の大雪によるJRの運休時には、道東道を利用した旅客・貨物の代替輸送が行われ、人流・物流の維持に貢献しました。さらに、令和5年及び令和6年に函館港・小樽港におけるクルーズ船対応岸壁が完成・供用し、令和7年の両港のクルーズ船寄港回数は過去最高の108回となり、コロナ後の観光を支える即戦力のインフラとして寄与しています。

今年も引き続き、第9期計画を踏まえ、社会資本整備を着実に進めていくことが私に与えられたミッションと考えています。

また、アイヌ文化の復興拠点である「民族共生象徴空間（ウポポイ）」は、昨年7月に開業5周年を迎え、開業から160万人以上の多くの方々にご来場いただきました。このたび地元・北海道をはじめとした皆様のご支援、ご協力に感謝して、令和8年3月末までの間、「ウポポイ開業5周年特別イベント」が実施されています。北海道開発局としても、より多くの方がアイヌ文化を体験し、民族共生の理念に共感してもらえるよう、引き続き関係機関と協力してウポポイの誘客促進に取り組んでまいります。

北海道総合開発計画は、北海道の開発を通じて全国の課題解決に貢献することを使命としており、北海道の強みと価値を糧に、明治以降の開拓の歴史の中で培われてきたフロンティア精神を再び發揮し、食料安全保障の確保、観光立国の推進、2050年カーボンニュートラルの実現という我が国の課題解決、ひいては我が国の豊かな経済・社会づくりに貢献していきたいと思っております。

結びになりますが、皆様のご健勝とご発展をご祈念申し上げまして、新年のご挨拶とさせていただきます。